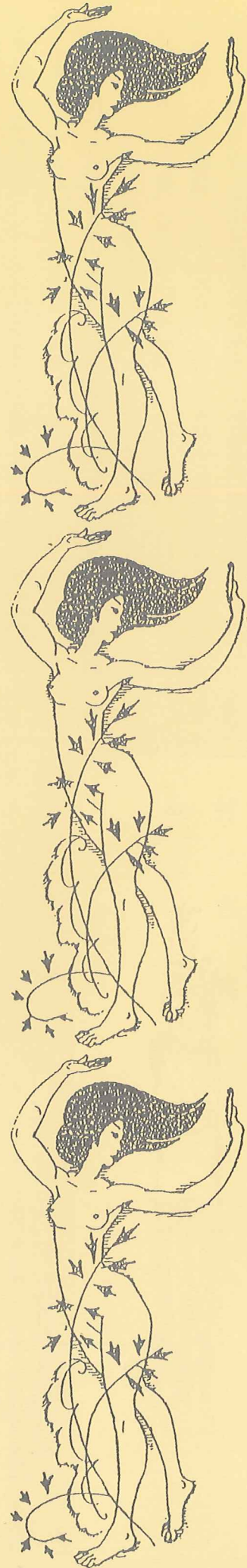


変態心理

一九二七年〜一九二六年

新刊



全三四卷十別冊一

揃定価 本体三〇万三〇〇〇円十税

中村古峽 主幹 日本精神医学会 発行



反逆の女性

「変態」とは、「常態」ではないこと、「変態心理」とは異常心理、

超心理をいう。大正六年創刊の本誌は、現在でいうところの

多重人格、トラウマ、精神病質、神経衰弱、心霊現象、催眠現象、

マインド・コントロール、サイコセラピーから買売春、嬰兒殺し、

ドメスティック・バイオレンス、幼児虐待、ストライキなどの

さまざまな「変態」の具体的事例を満載した研究雑誌である。

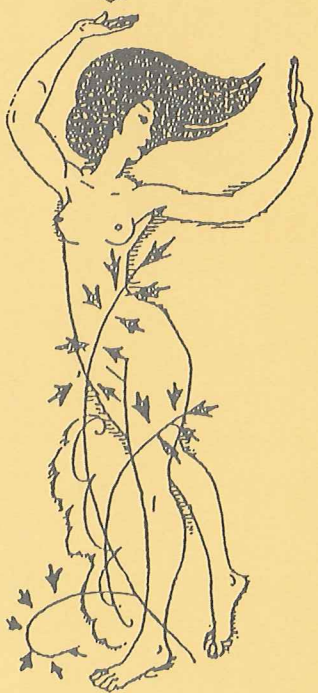
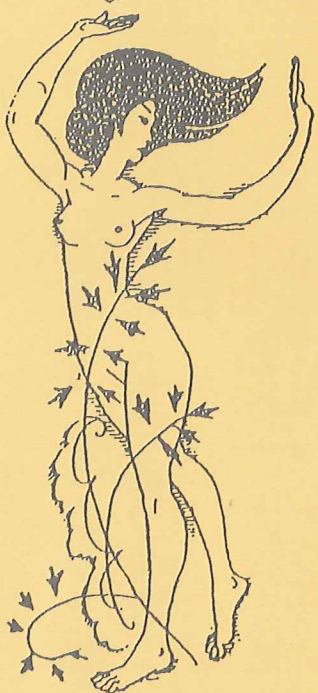
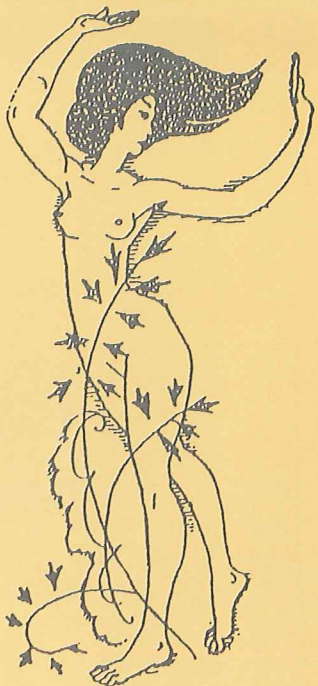
心理学・精神医学はもとより、近代文化史とくに文学・性・女性・

宗教・教育・風俗・犯罪・差別などの分野に広く活用できる

資料の宝庫である。

不二出版

社会心理学・社会精神医学の先駆的雑誌を全冊復刻！



刊行にあたって

雑誌『変態心理』は、足掛け十年、一〇〇冊を越える全号に目を通すことがきわめて難しく、誌名からの誤った連想も働いてか、これまで一部の好事家の関心だけしかひいてこなかったが、実際には漱石門下の中村古峽が文学を棄てて創刊した真摯な研究雑誌である。

「変態」とは文字通り「常態」ではないこと、「変態心理」とは異常心理、超心理ということにほかならない。しかも古峽の関心の対象は性、幻覚、妄想、夢、催眠、心霊、狂気、自殺、犯罪などの個人心理だけでなく、迷信、流言、宗教、教育、同盟罷業などの集団的心理現象にまで及び、社会の各層から多種多様な事例を収集した上で、それらを物質的、肉体的な欠陥や病気としてではなく、精神的、心理的な変態現象として、あくまで科学的に解明しようとした。医学、生物学、心理学、心霊学、文学、教育学、社会学、民俗学、宗教学、その他さまざまなジャンルの人々がここに集まり、アカデミズムの専門の枠を超えた論文や報告を発表し合った。大本教の科学的批判、震災直後の流言の調査報告、青少年問題や売春婦についての事例報告なども目を引く。

森田療法で知られる森田正馬は古峽の最大の協力者であり、療法確立期の著作の多くをこの雑誌に発表している。その他、井上円了、福来友吉、小熊虎之助、高峰博、永井潜、寺田精一、上野陽一、中村春二、久保良英、田中香涯、柳田国男、南方熊楠、金田一京助、長谷川如是閑、杉村楚人冠、伊東忠太、幸田露伴、内田魯庵、生田長江、小川未明、青野季吉、岡本かの子、吉屋信子ら、執筆者はまことに多士済々である。大正期の社会と文化を底から照らし出す貴重な資料として広く活用いただけるものと信じる。

編集委員



突門大王

「推せんしませ」

古くて新しい心の問題の宝庫

大原健士郎

（金沢医科大学名誉教授・日本社会精神医学会理事長）

中村古峽が主幹した『変態心理』がこのたび復刻されると聞き、驚きと喜びの気持ちでいっぱいである。四〇年ほど前に私が精神科医になった頃、この雑誌は既に廃刊になっていたが、精神医学・精神衛生の領域では播きざない知名度をもっていた。

私は森田療法を創始した森田正馬に傾倒する立場であるが、森田が古峽と親しい仲であったことも関係して、第一巻より「迷信と妄想」を連載し、夢研究、つきものの研究など、重要な研究を発表していることが目につく。

「変態心理」という言葉は現代風には「異常心理」ということで、この雑誌はさまざまな精神医学的・心理学的な問題を取扱っている。執筆者も医学や心理学だけでなく、著名な文学者なども参加し、社会全体の問題として取り組む姿勢が見られる。本誌には古くて新しい社会問題（心の病、自殺、少年非行、教育など）がふんだんに盛り込まれ、目を見張るものがある。早く全巻を手にとつて学びたい気持ちである。

多彩で画期的な「変態心理」のカテゴリー

南博

（橋大学名誉教授・日本心理センター所長）

「変態心理」という言葉は、今日では全く使われなくなり「異常心理」という言葉にいつてかわられた。

しかし、収録された多岐にわたるテーマをこのように広くとりあげた雑誌はその後にも現れない。

大正六年の創刊以来、編集の中心として尽力した中村古峽は東大文学部の出身であるが、その視野も異常心理の問題にとどまらない。創刊号には、作家の幸田露伴や、森田療法を創始した森田正馬、心霊現象の研究者の福来友吉を始めとする、精神医学・心理学

精神病とは如何なるものぞ

醫學博士 森田正馬



夫れ狂人は一種の病なり。身體の病に對して特に精神病と名づくるまでの事なり。一般の病に對して眼の病を特に眼科にて取り扱ふと同じ事なり。病には熱に苦しむ懊惱もあれど、肺炎カタル、腎臓炎等の如き、人目にも己が感じの上よりも、特に著しき容體のなきものもあり。是等目立ちたる容體なきものも、一度び病となるときは少く激しき努力をなし若くは何かの機會にあひて種々の容體あらはれ命にもかゝる事となるものなり。世の人多くは精神病を以て、ひたすらに錯亂し取亂せるものとのみ思へり。之れ、恰も殺人者を以てまじり裂け髪逆立ちたる人相のものと思へ、或は心中したる人を色白の面長かと思ひ、或は會我道家は道を行くにもおどりふざける考を持つ人を以て單に常識的なりといふも未だいひ盡したりといふべからず。その觀る人の立場と觀方との異なるがためなり。

から昭和のはじめにかけての当時の人々の息づかいを大きく感じがして、非常に貴重なものだと思つていた。

知る人が少ないのはまことに残念に思つていたところ、このたび、先生の編集された雑誌が、当時の雰囲気のまま復刻され、永年の夢がかなつた。目次をみせてもらつたが、貴重な記事がそろつており、精神衛生雑誌の編集にたずさわつてゐる者として、あらためて敬意を表する次第である。

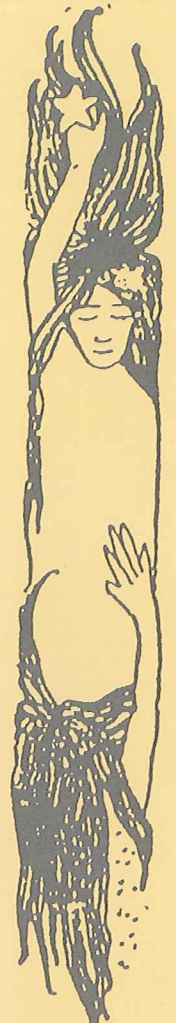
隠蔽された社会病理の言説

関井光男

（近畿大学文学部教授）

大正期は急激な社会変革が日本だけでなく、世界全体で起こつた時代である。大正デモクラシーあるいは教養主義の潮流への視線だけでは、この変革期をとらえることはできない。資本主義社会の膨張と矛盾がこの時期に露骨なまでに表出し、日本全体を揺り動かしてゐたからである。地方から流入する人口の増大と大都市の異常な膨張、それに伴つて有産者、都市中間層、労働者層の貧富の差が広がり、労働運動、犯罪の多様化が生じ、心身の病が社会病理としてあらわれた。中村古峽主宰の『変態心理』は、この変革期に出現した病理を人間の精神の疾患としてとらえなおし、文明社会の暗部を照射した。

だが、この雑誌は、今日では一部の識者を除いてその存在すら忘れられている。忘れられる要因をつくつたのは、戦後の社会であるが、これはある意味で言説の隠蔽である。『変態心理』を読むことは、この覆い隠された言説の扉を開き、大正の知識人たちのふりまいた人類への意志、日本の国際化、文化の向上というスローガンの欺瞞と空疎さを知ることになるだろう。そして、現代の社会が抱えている世紀末の社会病理の現象に通じるものを喚起されるであろう。『変態心理』という雑誌の言説はそれほどインパクトがある。この時期に発行された同種の雑誌に北野博美主宰の『性之研究』（大正八）、田中香涯主宰の『変態性慾』（大正一一）、沢田順次郎主宰の『性公論』（大正一三）



「雅せんしませ」

古くて新しい心の問題の宝庫

大原健士郎

（浜松医科大学名誉教授・日本社会精神医学会理事長）

中村古峽が主幹した『変態心理』がこのたび復刻されると聞き、驚きと喜びの気持ちでいっぱいである。四〇年ほど前に私が精神科医になった頃、この雑誌は既に廃刊になっていたが、精神医学・精神衛生の領域では揺るぎない知名度をもっていた。

私は森田療法を創始した森田正馬に傾倒する立場であるが、森田が古峽と親しい仲であったことも関係して、第一巻より「迷信と妄想」を連載し、夢研究、つきものの研究など、重要な研究を発表していることが目につく。

「変態心理」という言葉は現代風には「異常心理」ということで、この雑誌はさまざまな精神医学的・心理学的な問題を取扱っている。執筆者も医学や心理学だけでなく、著名な文学者なども参加し、社会全体の問題として取組む姿勢が見られる。本誌には古くて新しい社会問題（心の病気、自殺、少年非行教育など）がふんだんに盛り込まれ、目を見張るものがある。早く全巻を手にとって学びたい気持ちである。

多彩で画期的な「変態心理」のカテゴリー

南博

（橋大学名誉教授・日本心理センター所長）

「変態心理」という言葉は、今日では全く使われなくなり「異常心理」という言葉にすっかりかわられた。

しかし、収録された多岐にわたるテーマをこのように広くとりあげた雑誌はその後も現れない。

大正六年の創刊以来、編集の中心として尽力した中村古峽は東大文学部の出身であるが、その視野も異常心理の問題にとどまらない。創刊号には、作家の幸田露伴や、森田療法の森田正馬、心霊現象の福来友吉を始めとする、精神医学・心理学の専門家が寄稿している。また、当時の新聞雑誌で話題になった、不良少年・不良少女、ヒステリーと迷信、二重人格者、売笑婦などのケースもたんねんに拾っている。

なお、この雑誌では、アドラー、フロイト、ユングなどを紹介しているのも先駆的である。

最終刊に近い特集では、反逆の女性号とし、長谷川時雨・岡本かの子などが寄稿者として名を連ねている。

当時、画期的だったこの雑誌の背景には、大正デモクラシーと、大正モダニズムの芽ばえがあり、それが内容にも反映して、今日の読者にとっても十分に魅力あるものとなっている。

大正文化を総動員した精神科学大系

山下武

（作者）

アカデミズムの枠を超えた異常心理、超心理の研究に先鞭をつけた中村古峽の前人未踏の業績は、わが国でこれまで殆ど顧みられることなく、その機関誌『変態心理』のごときも風化するままに任されてきたのを遺憾とする。

それだけに、近年俄に内外の多重人格症例が話題になるなど、複雑な人間心理への関心が高まりつつある状況と呼応して、中村古峽が心魂を傾けた『変態心理』全巻が復刻発行を見ることは、まさに快事といわなければならぬ。

主著『二重人格の女』に代表される多重人格を始め、流言蜚語、心霊、性、宗教、狂気、犯罪など、およそ人間の深層心理の脈脈に彼が線を入れない分野は一つとしてなかった。森田正馬ら執筆陣の多彩な顔ぶれも本誌の特色で、あたかも大正期の文化人を総動員した観があり、しかも更に驚くべきことには、それらの多彩な論稿が互いに相寄り相扶けて、中村古峽の目指した新しい精神医学の一文文化大系を織り成していることである。『変態心理』の復刻は現在の混乱した日本の精神文化に対して幾多の問題と解答の暗示を与えるものと信じて疑わない。

大正人の精神生活が目の前に

小峯和茂

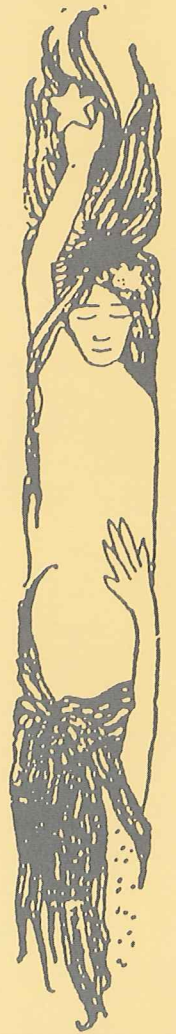
（財団法人日本精神衛生会常務理事）

日本の精神衛生史資料を調べていると、医学論文は残っているものの、戦前の社会で実際に行われていた医療の記録は、散逸して、まとめることは難しい。

精神衛生関係の資料は、世相を反映し、その時代に生きている人々のあり様と直接からんでいるので興味深いのだが、世代がかわると、忘れさられてしまふ。中村古峽先生の著作は、手元に僅かに残っているものを読んだだけでも、大正時代

理心態變

に於て種々の容體あらはれ命にかゝる事となるものなり。
世人多くは精神病を以て、ひたすらに錯亂し取亂せるもののみ思へり。之れ、恰も殺人者を以てまじり裂け髪逆立ちたる人相のものと考へ、或は心中したる人を色白の面長かと思ひ、或は會我他家は道を行くにもおどろふぞけながら歩くと思ひ、扱はタドン屋は色黒の小男かと思へるが如くなるべし。
かゝる考を持つ人を以て單に常識的なりといふる未だいぢ盡したりといふべからず。その観る人の立場と觀方との異なるがためなり。



から昭和のはじめにかけての当時の人々の息づかいをきく感じがして、非常に貴重なものだと思っていた。

知る人が少ないのはまことに残念に思っていたところ、このたび、先生の編集された雑誌が、当時の雰囲気のまま復刻され、永年の夢がかなった。目次をみせてもらったが、貴重な記事がそろっており、精神衛生雑誌の編集にたずさわっている者として、あらためて敬意を表する次第である。

隠蔽された社会病理の言説

関井光男

（近畿大学文学部教授）

大正期は急激な社会変革が日本だけでなく、世界全体で起こった時代である。大正デモクラシーあるいは教養主義の潮流への視線だけでは、この変革期をとらえることはできない。資本主義社会の膨張と矛盾がこの時期に露骨なまでに表出し、日本全体を揺り動かしていたからである。地方から流入する人口の増大と大都市の異常な膨張、それに伴って有産者、都市中間層、労働者層の貧富の差が広がり、労働運動、犯罪の多様化が生じ、心身の病が社会病理としてあらわれた。中村古峽主宰の『変態心理』は、この変革期に出現した病理を人間の精神の疾患としてとらえなおし、文明社会の暗部を照射した。

だが、この雑誌は、今日では一部の識者を除いてその存在すら忘れられている。忘れられる要因をつくつたのは、戦後の社会であるが、これはある意味で言説の隠蔽である。『変態心理』を読むことは、この覆い隠された言説の扉を開き、大正の知識人たちのふりまいた人類への意志、日本の国際化、文化の向上というスローガンの欺瞞と空疎さを知ることになるだろう。そして、現代の社会が抱えている世紀末の社会病理の現象に通じるものを喚起されるであろう。『変態心理』という雑誌の言説はそれほドインパクトがある。この時期に発行された同種の雑誌に北野博美主宰の『性之研究』（大正八、田中香涯主宰の『変態性慾』（大正一一）、沢田順次郎主宰の『性公論』（大正一一）などがほかにあるが、その言説の源流は『変態心理』にある。しかも、影響はこの種の雑誌だけにみられるのではない。江戸川乱歩、横溝正史などの探偵小説、大正から昭和初頭にかけての谷崎潤一郎などの小説にも及んでいる。この雑誌の復刻は、その意味で新たな知的刺激を各界に与えることになるだろう。

少年教養問題號

第一號 七月 第十四卷

異常児の定規分類に其類別
少年鑑別とペーカ―制事財團
歐米社會の兒童問題
交友と不良少年
孤生子の社會學的的研究
少年精神病者の心理検査
俄に見て泣き喚ぶ少年
洛北名物里子の現況
現代小學校教育の實際問題
入學試験に於けるメンタルテストの問題
少年心理を描ける名作物語

境野黄洋 高群逸枝 原胤昭 村上專精
柳保三郎 田中香涯 平田元吉 村上辰午郎
佐多芳久 近角常観 福来友吉 森田正馬
佐藤政治 千葉龜雄 富士川游 谷津直秀
沢柳政太郎 辻潤 藤沢衛彦 柳田国男
三田谷啓 土田杏村 布施辰治 柳原輝子
島地大等 寺田精一 穂積重遠 吉岡弥生
下田次郎 留岡幸助 松村介石 吉田金重
菅原教造 鳥谷部陽太郎 松村松年 米田雄郎
杉田直樹 永井潜 三田村鳶魚
杉村楚人冠 中村古峽 南方熊楠
高島平三郎 中山太郎 三宅曠一
高島米峰 生江孝之 宮島資夫
高峰博 馬場孤蝶 三輪田元道

秋田雨雀 賀川豊彦
安部磯雄 萬西又次郎
生田長江 片上伸
市場学而郎 加藤玄智
井東憲 加藤咄堂
伊東忠太 北野博美
井上四了 金田一京助
井上哲次郎 久保良英
巖谷小波 倉橋惣三
上野陽一 厨川白村
内田魯庵 栗山信次郎
小河滋次郎 幸田露伴
沖野岩三郎 小酒井不木
小熊虎之助 小島徳弥

「主要執筆者」一覧

- 秋田雨雀 賀川豊彦
- 安部磯雄 萬西又次郎
- 生田長江 片上伸
- 市場学而郎 加藤玄智
- 井東憲 加藤咄堂
- 伊東忠太 北野博美
- 井上四了 金田一京助
- 井上哲次郎 久保良英
- 巖谷小波 倉橋惣三
- 上野陽一 厨川白村
- 内田魯庵 栗山信次郎
- 小河滋次郎 幸田露伴
- 沖野岩三郎 小酒井不木
- 小熊虎之助 小島徳弥
- 境野黄洋 高群逸枝 原胤昭 村上專精
- 柳保三郎 田中香涯 平田元吉 村上辰午郎
- 佐多芳久 近角常観 福来友吉 森田正馬
- 佐藤政治 千葉龜雄 富士川游 谷津直秀
- 沢柳政太郎 辻潤 藤沢衛彦 柳田国男
- 三田谷啓 土田杏村 布施辰治 柳原輝子
- 島地大等 寺田精一 穂積重遠 吉岡弥生
- 下田次郎 留岡幸助 松村介石 吉田金重
- 菅原教造 鳥谷部陽太郎 松村松年 米田雄郎
- 杉田直樹 永井潜 三田村鳶魚
- 杉村楚人冠 中村古峽 南方熊楠
- 高島平三郎 中山太郎 三宅曠一
- 高島米峰 生江孝之 宮島資夫
- 高峰博 馬場孤蝶 三輪田元道

二重人格の女

中村古峽

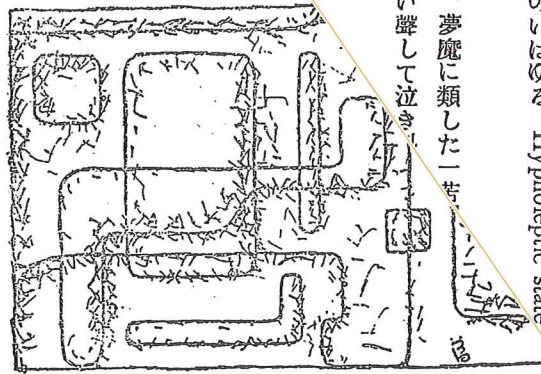
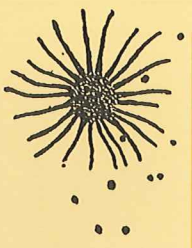
九、坂まさ子のA第二人格

(一) A第二人格久成氏の正體

坂まさ子のA第二人格は、いつも催眠状態から誘導される。但し催眠状態から誘導されるといつても、催眠術の示で喚起されるのではなく、催眠状態を基調として、その状態中から自然的に發現して来るのである。覺醒して直接に、または催眠状態を経過せずして他の状態から自然的に、このA第二人格の誘起されたことは、この人格は余が既に本誌大正八年一月號に詳述しておいた如く、偶然の機會から發見されたもの、**逆の女性號**の施術に依つて今日までに、無慮數十回に亘つて實驗されてゐるが、いつも久成と自稱する。

今彼女を催眠状態に導いて、更にこれを平穩なる自然的夢遊状態に移し、暫間の沈黙が續く。ポリス・サイデイスのいはゆる Hypnotic state に其處から生れ出て来るのである。

時によるとA第二人格の出る少し前に、夢魔に類した一若か「虎が出て来た」とか云つて、恐ろしい聲して泣き出す。



逆の女性號

東西兩洋史に現はれたる**逆の女性**——

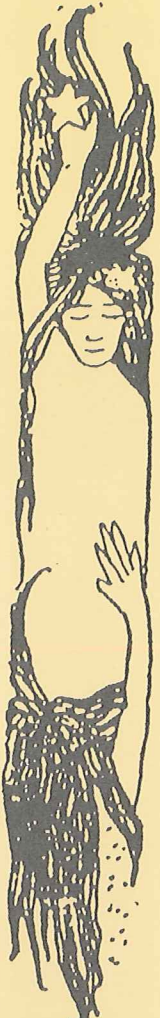
西洋史上に見えたる 逆の女性	早稻田大學教授 本多淺治郎 (二)
日本史に現はれたる 逆の女性	國學院大學教授 大森金五郎 (二四)
文學に現はれたる 女性の反抗 ……	馬場 孤蝶 (二八)
貧民窟の 女の反逆性 ……	賀川 豐彦 (三〇)
貞操觀念の 再生 ……	生田 長江 (三三)
婦人の 反逆精神と教育 ……	原田 實 (三五)
人及び革命家としての ローザ・ルクセンブルグ ……	青野 季吉 (三九)
近代劇に現はれたる 叛逆の女性 ……	藤井 眞澄 (三四)

変態心理

【復刻版刊行概要】

全三四卷十別冊

◎編集委員……小田 晋(筑波大學名譽教授・精神医学) 十栗原 彬(立教大學教授・政治社会学) 十佐藤達哉(福島大學助教授・心理学) 十曾根博義(日本大學教授・近代文学) 十中村民男(中村古峽記念病院理事長・院長)



◎体裁……A5判/上製/総約一万二〇〇〇ページ/全一〇三号を34卷に合本製本

◎別冊……解説(曾根博義)・「中村古峽と私」(中村民男)・総目次・索引

◎挿定価……本体三〇万三〇〇〇円十税

◎配本……全三回配本【完結】

- 〈復刻版巻数〉
- | | | |
|----------------|-----------------|---------------------|
| 第1巻～第12巻…………… | 〈原本巻号数/原本発行年月〉 | 第1回配本 |
| 第13巻～第23巻…………… | 第1巻第1号～第6巻第6号 | 定価Ⅱ本体一〇万円十税 |
| 第24巻～第34巻…………… | 大正六年一月～九年二月 | |
| 十別冊1…………… | 第七巻第1号～第二巻第3号 | 第2回配本 |
| | 大正一〇年一月～二年二月 | 定価Ⅱ本体一〇万円十税 |
| | 第二三巻第1号～第一八巻第4号 | 第3回配本 |
| | 大正一三年一月～一五年一〇月 | 定価Ⅱ本体一〇万三〇〇〇円十税 |
| | (別冊)解説総目次・索引 | (別冊のみ分売可Ⅱ本体三〇〇〇円十税) |

◎関連図書のご案内

『変態心理』と中村古峽

——大正文化への新視角

中村古峽主幹の雑誌『変態心理』は、精神疾患や異常心理現象に対して、幅広い分野の専門家を結集、差別を排した科学的な光を当て、近代人の心の闇に迫った。古峽自らも「精神医学」「変態心理学」を説いて「二重人格の研究、新宗教批判、精神分析の紹介を行い、先駆的な業績を残した。『変態心理』と中村古峽に関する初めての共同研究書・資料集！

- 編集委員 小田晋 十栗原彬 十佐藤達哉 十曾根博義 十中村民男
- A5判 上製 カバー装/三八〇ページ
- 定価Ⅱ本体六五〇〇円十税
- 二〇〇一年一月刊行



2001・5

不二出版(株)

〒113-0023 東京都文京区向丘1-2-12
 電話 〇三〇三三三一・二四四三三
 ファクシミリ 〇三〇三三三一・二四四六四
 振替 〇〇160294084

●表示価格は、全て税別です。